

# 結果構文に対する「被動者制約」と構文融合

奥 野 浩 子

## 0. はじめに

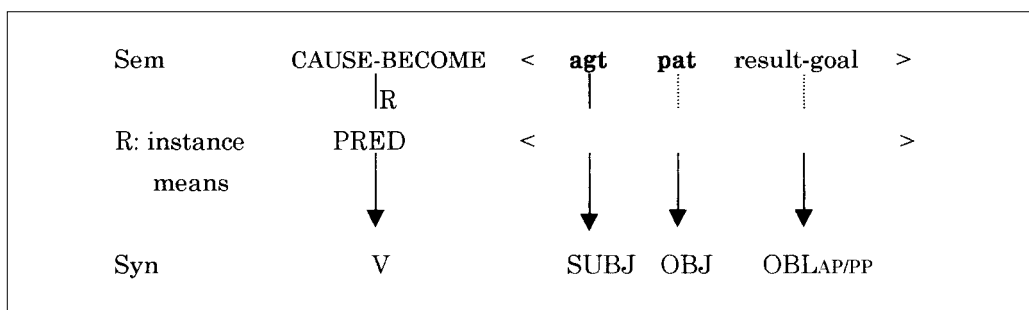
本稿では、Goldberg (1995) で提案された構文文法の枠組みで、結果構文について二つの問題を考えてみたい。一つは、「結果句は被動者を叙述する」という被動者制約の妥当性についてであり、もう一つは、一つの文に状態変化と位置変化の両方が表される場合の扱いについてである。

結果句が他動詞の目的語を叙述する場合には、この目的語を被動者と扱うことに問題はないが、非下位範疇化目的語や見せ掛けの再帰代名詞( fake reflexive )の場合でも被動者といえるであろうか。次節では、具体例をみながら、結果句が叙述する非下位範疇化目的語にはどのようなものが許されるかを明らかにし、結果句で叙述されるものは意味的・語用論的に規定すべきであることを論じる。次に、一つの文で、状態変化と位置変化の両方が表されると「一義的経路の制約」に違反することになるが、実際には二つの変化を一文で表している例があるので、この違反はどのような時に許されて、また、どのように扱うべきであるかを考える。構文文法の枠組みでは、動詞が二つの構文に融合され、従って構文が融合すると提案することになる。

## 1. 非下位範疇化目的語と被動者制約

Goldberg (1995) は、結果構文の結果句は被動者を記述するものであるとして、この構文を(1)のように表示している。

### 1. Resultative-Construction



( Goldberg 1995:189 )

構文の項役割( argument role )である被動者( patient )は、述語の参与者役割( participant role )と破線で結ばれていることから、必ずしも述語の参与者役割と融合されなくともよく、構文によってのみその生起が保証される可能性がある。構文によってのみ生起が保証される場合とは、非下位範疇化目的語をとる場合であるが、非下位範疇化目的語であって、被動者であるとはどのようなことであろうか。Goldbergは被動者を( 2 )のように捉えて、結果構文を( 3 )のように一般化している。

2. the resultative can only apply to arguments that potentially ( though not necessarily ) undergo a change of state as a result of the action denoted by the verb. Such arguments are traditionally identified as *patients*. ( Goldberg 1995: 180 )
3. Resultatives can only be applied to arguments which potentially undergo a change of state as a result of the action denoted by the verb. ( Goldberg 1995: 188 )

つまり、結果句は、動詞によって表される行為の結果、状態変化を受ける可能性のあるものについて叙述するものであり、このように規定されるものは被動者である、というのがGoldbergの主張である。彼女は更に、動詞が表す行為と状態変化の間には直接的な因果関係がなければならないという( 4 )のような意味制限を設けている。

4. The action denoted by the verb must be interpreted as directly causing the change of state: no intermediary time intervals are possible. ( Goldberg 1995: 193 )

このような枠組みで考えると、結果が述べられる「被動者」とされるものは、動詞が表す行為に何らかの形で直接関わっていて、その行為によって状態変化を被る可能性のあるものということになる。非下位範疇化目的語は、どのように行為に関わっているものであるかを考えてみよう。

まず、( 5 )は見せかけの再帰代名詞をとっている例である。用いられている動詞は自動詞であり、再帰代名詞は構文の要請で出現したものである、と説明される。行為者自身がその行為をするわけであり、しかもその行為によって何らかの状態変化を被っているのが被動者とみなすことができる。

- 5a. Tom talked himself hoarse.
- b. Mary laughed herself silly.
- c. poor Sam ... had coughed himself into a haemorrhage. ( RH&L 2001 )
- d. " Don't use my name, " I said, blinking myself awake. ( Levin 1999 )
- e. I guess I've danced myself stiff. ( L&RH 1999 )
- f. Well, the conclusion was that my mistress grumbled herself calm. ( L&RH 1995 )
- g. Peter quickly read himself into an inferiority complex. ( L&RH 1999 )
- h. She slept herself sober. ( Verspoor 1997 )

(6)でも、自動詞が用いられているが、その行為により行為者自身ではなく、行為者の身体の一部や行為者の所有物の変化が述べられている。

- 6a. John danced his feet sore. (Verspoor 1997)
- b. Sleep your wrinkles away. (L&RH 1995)
- c. I cried my eyes blind. (Simpson 1983)
- d. You may sleep it [= the unborn baby] quiet again. (L&RH 1995)
- e. Drive your engine clean. (L&RH 1995)
- f. Pat ran her shoes to shreds. (RH&L 1998)
- g. He sneezed his handkerchief completely soggy. (Carrier & Randall 1992)

(6a, b, c)では、主語の身体の一部である足やしわや目の状態変化が、(6d)では、主語の身体内部にある胎児の変化が表されており、(6e, f, g)では、主語の所有物である車のエンジンや靴やハンカチの変化が述べられ、行為者自身の行為により、行為者の身体の一部やその所有物が変化することが表されている。行為者と身体の一部は「全体・部分」の関係であり、行為者とその所有物は「接触」の関係にあるといえる。このような、部分とか接触の関係にあるものは、行為者の行為から直接影響を受け何らかの変化を被るものと考えすることは容易に推察できる。

(7)でも、(5)(6)と同様に自動詞が用いられているが、目的語は再帰代名詞ではないし、主語の身体の一部でも所有物でもない。(7a)では、犬が鳴いて、その鳴き声が近所の人を起こしたのであり、(7b, c)では、主語が発する音声が、それを聞いた人たちの状態変化を引き起こし、(7d, e)では、目覚まし音や時計の音により人が目を覚ましたことが表され、(7f)では、ある語の響きをベルの音に喩えて、その音が幼少時の思い出へといざなうことが表され、(7g)では、電話が鳴ってその着信音で私がうたた寝からさめたことが表されている。ここで用いられている動詞は何か「音を発する」ことを表している。目的語は、その音が、意識的にであれ無意識的にであれ、聞こえる範囲に在るものでなければならない。ここでの目的語は行為者の発する音を「聞く」という点で、行為への関わりが認められる。「音を聞く」あるいは「音が聞こえる」ということは、非下位範疇化目的語と音との「接触」と捉えることも可能である。

- 7a. The dog barked the neighbor awake. (RH&L 1996)
- b. The professor lectured the class into a stupor. (Carrier&Randall 1992)
- c. He sang us all to sleep. (L&RH 1999)
- d. He had set an alarm, which rang at five thirty the following morning, shrilling them both awake. (L&RH 1996)

- e. The clock ticked the baby awake. ( L&RH 1995 )
- f. The very word was like a bell that tolled me back to childhood summers( L&RH 1996 )
- g. The phone rang me out of my slumber. ( L&RH 1995 )

次の( 8 )の例の目的語は、文には現れていない本来の目的語、つまり、本来の被動者を包含しているものである。言い換えると、本来の被動者と「全体・部分」の関係にあるといえる。

- 8a. They drank the pub dry. ( RH&L 1999 )( pub     alcohol )
- b. They drank the teapot dry. ( L'RH 1995 )( teapot     tea )
- c. The cattle ate the field bare. ( RH&L 1996 )( field     grass )

( 8a )で、実際に飲まれたものはパブにあるアルコールであり、( 8b )では実際に飲まれたものはティポットの中のお茶であり、( 8c )では実際に食べられたものは草原に生えていた草である。

行為が行われる場所に関係するものが目的語になっている例もある。

- 9a. The chef cooked the kitchen walls black. ( Carrier & Randall 1992 )
- b. Fred cooked the stove black. ( Jackendoff 1990 )
- c. The children rolled the grass flat. ( RH&L 2000 )

( 9a, b )では、調理された場所である調理場の壁や、コンロが目的語として表されており、( 9c )では、こどもたちが駆けまわった場所に生えていた草が目的語になっている。ここでも、ある場所とその場所に存在するものは「全体・部分」の関係にあるということが出来る。

( 5 )( 9 )を整理すると、結果構文に許される非下位範疇化目的語は、動詞が表す行為の主体である行為者や、行為者と「全体・部分」の関係、あるいは、行為者と「接触」の関係にあるものというように、「**行為者と密接な関係にあるもの**」と、行為によって発せられた音の受け手とか、行為の対象となるものと包含関係にあるものや行為の場所に関係するもののよう、「**行為そのものと密接な関係のあるもの**」である。

非下位範疇化目的語の例として、主に自動詞が用いられている例を見てきたが、他動詞でも次のように、非下位範疇化目的語をとる例がある<sup>1</sup>。

- 10a. Cinderella scrubbed her fingers to the bone. ( RH&L 1998 )
- b. And kicked himself into contention for the league's most Valuable Player honor( Levin 1999 )
- c. The gardener watered his sneakers soggy. ( Carrier & Randall 1992 )

(10a)では、行為の対象は床であるが、その床と指は接触していたがために擦り剥けてしまったのである。(10b)では、行為の対象は明らかにボールであるが、その行為の結果の行為者自身の変化が述べられている。(10c)では、行為の対象は植物であるが、水やりという行為の際に、その植物と庭師のスニーカーが接触していたために、植物だけでなくスニーカーに水がかかってしまったのである。他動詞の場合にも、非下位範疇化目的語として許されるのは、自動詞の場合と同様に、行為者自身と密接な関係にあるものか、行為に密接に関連するものであるといえる<sup>2</sup>。

このように特徴づけられるものを「被動者」と一括りにできるだろうか。Goldberg (1995 : 189)では、被動者の見分けに、よく知られている(11)のような patient テストを使うと論じている。

11a. What X did to <patient> was, ...

b. What happened to <patient> was, ...

(12)は、このテストをインフォーマントにチェックしてもらった結果である。

12a. What Tom did to **himself** was to talk himself hoarse.

b. ?What the dog did to **the neighbor** was to bark him awake.

c. What John did to **his feet** was to dance them sore.

d. What they did to **the pub** was to drink it dry.

e. \*What the chef did to **the kitchen walls** was to cook them black.

f. What Cinderella did to **her fingers** was to scrub them to the bone.

不自然であると判断された(12b)は、音の受け手であると考えた例であり、不可能とされた(12e)は、行為が行われる場所を表すと考えた例である。Goldberg は、(2)のように「動詞のよって表される行為の結果、状態変化を受ける可能性のあるもの」が結果句の叙述対象であるとしたが、これを「被動者」として、その見分けに統語テストを用いるところに問題があると思われる。さらに、Goldberg は(4)のように、動詞が表す行為と状態変化の間に直接的因果関係があると解釈されなければならないとしたが、この解釈には語用論的知識が関わっているように思われる。(12b)のように主語が発する音との接触や、(12e)のように行為の場所が変化する場合には、行為と結果との間に因果関係を認めるには、外界の知識が援用されているものと考えられる。したがって、(2)であげたように、動詞によって表される行為の結果、状態変化を受ける「可能性」のあるものという部分を、純粹に、意味的、語用論的に規定すべきである。これまでみてきたように、行為の結果、変化を受ける可能性があるのは、行為者自身を含めた「行為者と密接な関係にあるもの」と「行為に密接に関わるもの」である<sup>3</sup>。そして、密接な関係と判断されるのは、接触関係と部分の関係である。

## 2. 二つの変化と構文融合

今度は二つ目の問題を考えてみよう。(13)のような例では、状態変化動詞が方向句と共にあり、状態変化と位置変化の両方を表し、(14)の一義的経路の制約(Unique Path Constraint)に違反しているように思われる。

13a. He broke the walnuts into the bowl. (Goldberg 1995)

b. The butcher sliced the salami onto the wax paper. (*Ibid.*)

c. Joey grated the cheese onto a serving plate. (*Ibid.*)

d. Sam shredded the papers into the garbage pail. (*Ibid.*)

14. **Unique Path Constraint:** If an argument *X* refers to a physical object, then no more than one distinct path can be predicated of *X* within a single clause. The notion of a single path entails two things: (1) *X* cannot be predicated to move to two distinct locations at any given time *t*, and (2) the motion must trace a path within a single landscape. (Goldberg 1995: 82)

一義的経路の制約は、状態変化と位置変化という異質の変化を単一文に表現することを禁止する制約であるが、Goldberg自身、この制約に例外を認めるかのように、状態変化動詞が方向句と共に起できるのは、(15a)や(15b)に示すように、動詞の表す行為に付随してものの移動が含意される場合であるとしている。

15a. If the activity causing the change of state (or effect) when performed in the conventional way, effects some incidental motion and, moreover, is performed with the *intention* of causing the motion, then the path of motion can be specified. (Goldberg 1995: 172)

b. Paths of motion may be predicated of arguments of result verbs if the activity designated by the verb is associated with a conventional scenario in which the incidental motion can be construed as an intended and predictable effect. (Goldberg 2001: 520)

これに対しL&RH(1995:60)は、状態変化を受けたものと位置変化を受けた対象物は違うものであると論じている。(16a)では、割れた状態になったのは卵全体であり、位置変化をしたのはその中身である。(16b)でも同様に、全体と中身がそれぞれの変化を受けている。(16c)では、全体・中身ではなく、スライスされる前のマッシュルーム丸ごととスライスされたマッシュルームという、いわば、全体と部分の関係にあるものが、それぞれ状態変化と位置変化を受けているという。確か

に、二つの変化を同一文で叙述できるのは、全体と部分が同じ name で表されるものに限られるようである。(16d) が非文なのは、mirror の破片は *mirror* とは言えないことによると思われる。

- 16a. The cook cracked the eggs into the glass. (L&RH 1995)
- b. Daphne shelled the peas onto the plate. (*Ibid.*)
- c. slice the mushrooms into the bowl. (*Ibid.*)
- d. \*I broke the mirror into the garbage pail. (*Ibid.*)

次の例も(16)と同類と考えられる。

- 17. I melted the name off the mailbox with a hair dryer. (L&RH 1992)

言いかえると、状態変化を受ける前と後で同じ name であれば、二つの変化が表せるのである。一つの文で、状態変化と位置変化の両方を同時に表せるかどうかを規定するこの条件は、自動詞の場合にも適用されるようである。チョコレートは溶けてもチョコレートといえるので(18a)は可能であるが、水は凍ったら *ice* という name で表されるために(18b)は非文になるといえる。

- 18a. The chocolate melted out of the box. (Jackendoff 1990)
- b. \*The water froze out of the bottle. (*Ibid.*)

よく引用される次の例も同様に考えられる。*burn* という状態変化の動詞が、*into the calf's skin* という方向句と共に起して、状態変化と位置変化が一緒に表されている。

- 18. The branding iron burned into the calf's skin. (Croft 1991)

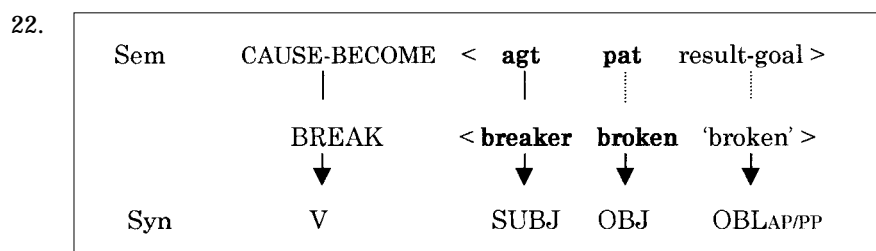
ここで、*branding iron* は「焼ごて」と「焼印の面」という、全体・部分の両方を表していると考えられる。*burn* という状態変化を受けたのは焼ごて全体で、位置変化を受けたのは焼印の面である。さらに、次の例でも、折りたたむという状態変化と、封筒の中に入れるという位置変化が一つの文で表されている。お金は折りたたまれる前も折りたたまれても *money* と言えるから可能である。しかし、お札を折りたたんでも必ずしも、その折りたたんだお札をどこかに移すという含意はないと思われるので、Goldberg の(15)の一般化は妥当ではないといわなければならない<sup>4</sup>。

- 20. She folded the money into the envelope. (Goldberg 2001)

では、状態変化と位置変化の両方を表す文は、構文文法ではどのように扱うことになるかを考えてみよう。まず、状態変化動詞である *break* の意味表示を Rappaport Hovav and Levin(1998) に従って、次のように仮定する。

## 21. break breaker broken 'broken'

ここで、'broken' は、*break* という状態変化動詞の中に語彙化されている状態を表すものとする<sup>5</sup>。この動詞が結果構文と融合すると(22)のように表すことができる。



'broken' は語彙的に指定されているので、(23a)のように表出されなくてもいいし、表出するのであれば、'broken' で指定される意味と矛盾しない句のみが許されると考える。

(23b) の *into pieces* は、動詞が語彙的に指定する 'broken' と矛盾しないが、(23c) の *worthless* は 'broken' と相容れないために非文となる<sup>6,7</sup>。

23a. I broke the vase.

b. I broke the vase into pieces.

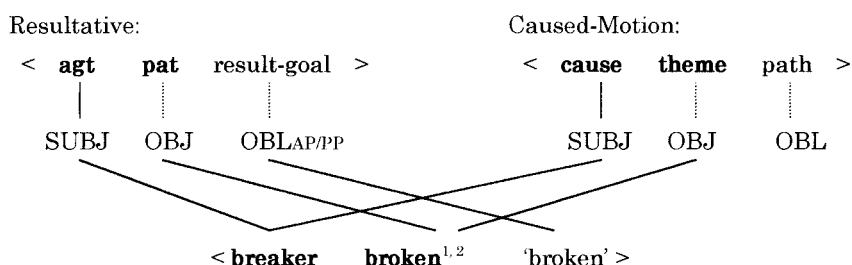
c. \*I broke the vase worthless.

さて、状態変化と位置変化の両方を表す文は、状態変化動詞が Resultative 構文と Caused-Motion 構文という二つの構文に融合したものであると考えられる。言いかえると、二つの構文が融合したものであると考えることができる。このとき、両構文の項役割のうち矛盾しないものは、同一の動詞の参与者役割と融合できると仮定する。つまり、項役割と参与者役割が 1 対 1 ではなく、2 対 1 で融合することができる。(13a) を例に考えてみよう。Resultative 構文の項役割 agt と Caused-Motion 構文の項役割 cause は、agt が cause の一例とみなすことができ矛盾しないので、ともに動詞 *break* の breaker という参与者役割と融合される。動詞の参与者役割である **broken** は、状態変化を受ける前と後で同じ name であるので、その二面性を上付き数字で表している。全体を表す **broken**<sup>1</sup> が Resultative 構文の項役割 pat と融合し、中身を表す **broken**<sup>2</sup> が Caused-Motion



構文の項役割 theme と融合して、状態変化をうけるものと位置変化を受けるものとが異なるので、Unique Path Constraint への違反はない。Resultative 構文の result-goal は、動詞により語彙的に指定されている 'broken' と結び付く。このように、二つの構文の融合を考えると、Caused-Motion 構文が指定する path は、動詞の意味に対応するものがないため、構文がその出現を保証していることになる。

## 24. Construction Fusion



(25)のような例も、構文の融合と考えられる。この文では、(26)で示す通り、通常の目的語がPPに生じていて、目的語は、非下位範疇化目的語ということになる。この非下位範疇化目的語で表されるものは、通常の目的語で表されるものと接触しているので、動詞が表す行為は、目的語NPとPP内のNPの両方に及ぶものと考えられる。たとえば、目を洗うとそこに付着している石鹸にも行為が及ぶのである。

25a. Terry wiped the crumbs off the table. (RH&L 1998)

- b. He washed the soap out of his eyes. (L&RH 1995)
- c. The child rubbed the tiredness out of his eyes. (RH&L 1998)
- d. The lumberjack rolled the bark off the log. (L&RH 1992)

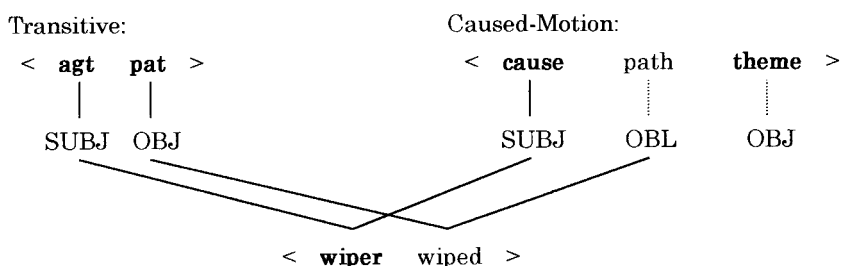
26a. Terry wiped the table.

- b. He washed his eyes.
- c. The child rubbed his eyes.
- d. The lumberjack rolled the log.

(25)では、TransitiveとCaused-Motionという二つの構文の融合と考えることができる。ここでも、Transitive構文の項役割 agt とCaused-Motion構文の項役割 cause は、ともに動詞 *wipe* の wiper という参与者役割と融合される。wiped という参与者役割は、Transitive構文の項役割 pat 及び、Caused-Motion構文の項役割 path と融合される。参与者役割の wiped がOBJとして具現化

されると規定される path 及び OBL として具現化されると規定される path に融合されるので、実際に統語で OBL に具現されるか OBJ に具現されるかが、問題になる。ここでの構文融合の結果、theme が構文から出現を保証され、OBJ として具現されることになるので、wiped はこれと衝突しないように最終的には OBL として具現されると考える。

## 27. Construction Fusion



ここで、Caused-Motion 構文が指定する項役割 theme が補われ、目的語として具現されることになるが、この theme は Transitive 構文の patient で表されるものと接触しているものでなければならない。

どのような場合に、構文の融合が可能になるかは、まだまだ検証が必要であるが、「全体・部分」「表面・付着物」という関係にあるものが、どちらも、何らかの働きかけや変化を受けると見なされる場合であるように思われる。あるものが何らかの働きかけを受けると、その部分や付着物も、その働きかけの影響を受けると考えられるからであろう。

## 3. おわりに

以上、この論文では Goldberg の構文文法の枠組みで、結果構文の被動者制約を純粋に意味的に規定すべきことと、一文で状態変化と位置変化が同時に表されている例は、二つの構文の融合と考えることができることを論じた。

結果構文が記述する典型的なできごととは、X が Y に働きかけた結果、Y が何らかの変化を被るということであるが、実際にデータをみると、Y の部分や Y と接触しているものが変化することが表されたり、X 自体の行為によって、X 自体が変化したり、X の部分や X と接触しているものが変化したりすることが表されている。つまり、働きかけや行為の場面に関わったものの結果が表されていることになる。さらに言い換えると、使役連鎖 (causal chain) がなければならないということになる。

被動者制約を純粋に意味的に規定するということは、使役連鎖は、働きかけや行為に関わったものだけでなく、その関わったものの部分や、それと接触の関係にあれば、形成されるという主張と等しい。また、全体と部分が同じ name で表される場合や、形状に変化が起こる前と後で同じ

name が可能な場合には、name 自体がもつ二面性により、それぞれについて別個の変化を述べる  
ことが可能で、一義的経路の制約に違反はなく、この制約に例外を設ける必要はないといえる。

## 註

- \* 本稿は、日本英文学会中部支部第54回大会(2002年10月20日、福井大学)シンポジウム「構文と意味」で発表したものに加筆したものである。当日、議論に参加して下さった出席者の皆さんに感謝致します。また、インフォーマントとして情報を提供してくれた Vic Carpenter 氏(弘前大学)にも謝意を表します。

- 1 他動詞が非下位範嚙化目的語をとることは、次のように、動詞が被動者をプロファイルしない場合に表出されないことが可能となり、構文からその生起が保証される。

Note that if the verb's patient-type participant role is profiled, then it *must* be fused with the patient argument role of the construction, if it is not profiled, then the construction does not rule out the possibility that it is unexpressed, and that the patient role is contributed by the construction. (Goldberg 1995: 239 note 5)

- 2 次のような例でも、他動詞が非下位範嚙化目的語をとっているが、行為の対象である「拘束物」と非下位範嚙化目的語で表されるものとは接触していると考えられる。

( i ) He cut himself free. ( Goldberg 1995: 194 )

( ii ) He cut himself loose. ( *Ibid.* )

( iii ) He cut himself with his knife. ( Genius English-Japanese Dictionary )

( iv ) I passed out, but they managed to cut me free. ( COBUILD on CD-ROM )

( v ) A man darted and dodged through the black smoke, trying to cut the horse free. ( *Ibid.* )

- 3 このように規定されるものにどのようなラベルをつけるかは別問題であるが、ここでは、意味的に規定された patient と考えておく。
- 4 さらに、インフォーマントによれば、次のように「意図性」を表さない副詞との共起や無生物主語も許されるという。したがって、ここでも、Goldberg の一般化(15)の妥当性が疑われる。

( i ) Sam {carelessly/ accidentally} broke the eggs into the bowl.

( ii ) The machine sliced the salami onto the wax paper.

- 5 'broken' という表記の仕方は、Goldberg (1995: 80) の drive- 'crazy' 文の扱いにおける 'crazy' の扱いに倣っている。
- 6 Goldberg (2001: 519) は、状態変化動詞は結果句をとれると述べているが、そう考えると、(23b) が可能で(23c) が不可能である理由を説明しなければならない。
- 7 状態変化動詞が結果状態を語彙化していると仮定し、なおかつ構文文法の枠組みで次のような、二つの状態変化を表す文の非文性は、二つの違反によると論じることができる。

( i ) \*The enemy bombed the residents homeless. ( RH&L 1996 )

( ii ) \*The bears frightened the campground empty. ( Carrier & Randall 1992 )

( iii ) \*The psychopath killed the village into a ghost town. ( Hoekstra 1992 )

一つは、それぞれの動詞がプロファイルする参与者である、爆撃された対象(bombed)である場所、怖い思いをさせられた(frightened)人間、殺された(killed)人間が、目的語として具現されていないこと、もう一つは、動詞が語彙化している結果状態を詳述する句ではないものが付け足されていることである。

## 参考文献

- Carrier, Jill & Janet H. Randall (1992) "The argument structure and syntactic structure of resultatives," *LI* 23-2, 173-234.
- Croft, William A. (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*, Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago: University of Chicago Press.
- \_\_\_\_\_. (1997) "The relationships between verbs and constructions," Verspoor, Marjolin, Kee Dong Lee & Eve Sweetser (eds.) *Lexical and Syntactical Constructions and the Construction of Meaning*, Amsterdam: John Benjamins, 383-398.
- \_\_\_\_\_. (2001) "Patient arguments of causative verbs can be omitted: The role of information structure in argument distribution," *Language Science* 23, 503-524.
- Hoeskstra, Teun (1992) "Aspect and theta-theory," Roca, I. M. (ed.) *Thematic Structure: Its Role in Grammar*, Berlin: Foris, 145-174.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structure*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Levin, Beth (1999) "Objecthood: An event structure perspective," *CLS* 35, 223-247.
- Levin, Beth & Malka Rappaport Hovav (1992) "The lexical semantics of verbs of motion: the perspective from unaccusativity," Roca, I. M. (ed.) *Thematic Structure: Its Role in Grammar*, Berlin: Foris, 247-269.
- \_\_\_\_\_. (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, Cambridge, MA: MIT Press.
- \_\_\_\_\_. (1999) "Two structures for compositionally derived events," *SALT* 9, 199-223.
- Rappaport Hovav, Malka & Beth Levin (1996) "Two types of derived accomplishments," *Proceedings of the First LFG Conference*, 375-388.
- \_\_\_\_\_. (1998) "Building verb meanings," Butt, Miriam & Wilhelm Geuder (eds.) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, Stanford, CA: CSLI Publications, 97-134.
- \_\_\_\_\_. (2000) "Classifying single argument verbs," Coopmans, Peter, Martin Everaert & Jane Grimshaw (eds.) *Lexical Specification and Insertion*, Amsterdam: John Benjamins, 269-303.
- \_\_\_\_\_. (2001) "An event structure account of English resultatives," *Language* 77-4, 766-797.
- Simpson, Jane (1983) "Resultatives," *Papers in Lexical-Functional Grammar*, 143-157.
- Verspoor, Cornelia Maria (1997) *Contextually-Dependent Lexical Semantics*, Ph.D. dissertation, University of Edinburgh.